

●書学書道史学会

## 会報

第5号

平成15年(2003)6月1日発行

編集・発行  
書学書道史学会  
事務局東京都渋谷区桜丘町29-35  
〒150-0031 美術新聞社内  
TEL(03)3462-5251(代)  
FAX(03)5489-7288(直)

●視点

## 書学書道史学会への期待

池田 温

一九九〇年(平成二)正月二十一日、国立教育会館で発会式を行い、同年四月一日に正式発足した本学会は、同十一月二十三・二十四の両日、本郷の東京大学法文二号館で第一回大会を挙行し、翌九一年(平成三)六月には『書学書道史研究』創刊号をB5判、クリーム色の高雅な装丁で世に送り出した。以降、年一冊着実に出版し、二〇〇二年(平成十四)には第十二号、今年は十三号が出る。創刊号を繙くと、「書道史研究の方法に関する一つの試論」(杉村邦彦)など九篇の労作が収録され、巻末には第一回大会報告に質疑をも紹介して四頁を充てている。杉村論考は、書を情況(時代背景)の反映としてとらえることを主軸に、作家論・作品論・書論の三分野に分かつて論ずる。氏の論考は漢字書作品の芸術的評論で、九世紀の張彦遠「法書要録」以来の伝統をもつものといえ、自ら『書論』誌を主宰される杉村氏の所論だけに迫力に富む。その後も陸續と掲載された書道史分野の論考を代表するものといえよう。

他方、書学の分野に属する論考や報告はあまり多くを見ず、中では萱

原晋「Handwriting」研究関連文献総目録」(一)～(三)が五号から七号

に連載されたのが記憶に残る。このビブリオグラフィーは言語学・心理

学・美学・教育学等の総合領域としてのGraphonomics(氏はこれを書学

基礎論と位置づけられている)の近年の動向を雄弁に示しており、漢字

やかなの書の研究も決してその枠外存在ではない。萱原氏が、多年に

わたり『書道美術新聞』、『書道研究』(休刊中)、『書道年鑑』等の編集発

行人としてわが国書道界マスコミの中心的役割を演じてきたことは周知

の通りである。自ら研究者であり女子短大の教員でもある氏が、既存の

競書雑誌や作品グラフ誌と本質的に異なる学界誌と全国的学会の存在の

必要性を痛感した所に、本学会と本誌が生まれる源があったとみてあや

まらぬであろう。そして初代理事長に選ばれた西林昭一(悠介)氏の学

徳により、本学会は基礎を確立し、当初の二百名から会員も今や五百名

を超すに至り、二〇〇〇年(平成十二)には東京で第四回国際書学研究

大会を挙行し、海外から四〇名の同学を迎え、わが国の四二篇と合わせ

て計八〇篇、総八三二頁の大冊記念論文集も出版した。本書は二〇世紀

東亜の書法研究を総括した一大遺産と称して過言ではないであろう。二

一世紀に入り本学会は、年二回会報を出すこととなった。会報の内容は

多岐にわたり、会員にとっては誠に有益なサービスである。しかしその

一方で編集に当たる編集委員諸氏の労苦は、並大抵のものではあるまい。

学会は興膳宏氏を二代目理事長に迎え、副理事長の杉村邦彦、松丸道

雄両氏の貢献も得て一〇年にわたり築き上げられた路線は一貫して承継

され、その基盤は一層の厚みを加えた。また、学会の運営がスムーズに

進行しているのは西林・萱原コンビ以来、会員と事務局が一心同体の協

調で事を処してきたからである。これからは若手の幹事諸氏の一層の尽

力も期待され、現代的感覚の学会の新展開が期待されるところである。

## 本年度・第14回大会開催案内

本年度の第14回書道史学会大会について、お知らせします。大会は今年は、10月10日（金）から12日（日）までの3日間にわたり、札幌市の藤女子大学Ⅱ写真Ⅱほかで開催する運びとなりました。詳細プログラムや発表者、各種案内等は後日お知らせしますが、現在までに固まっている大

要は以下の通りです。

○日程Ⅱ10月10日（金）午後4時30分から第31回定例理事会（於KKR札幌Ⅱ予定）

10月11日（土）は午前9時受付開始、9時30分から総会・研究発表・懇親会を順次行い、午後8時終了予定。

10月12日（日）は午前10時から、先年亡くなった敦煌学の藤枝晃氏、昨年急逝された名誉委員大庭脩氏のご遺族のもとに残されている研究資料類の特別展示と、関連する特別講演などを検討中です。（詳細未定）

○会場Ⅱ藤女子大学（北16条校舎）〒001-0016北海道札幌市北区北16条西2丁目／交通Ⅱ地下鉄南北線「北18条駅」下車徒歩5分、地下鉄東豊線「北13条東駅」下車徒歩10分／札幌駅から中央バス石狩方面行「北15西1停留所」下車徒歩2分（札幌駅からタクシードも2区間の距離）

○備考Ⅱ宿泊に関しては、役員の方々についてKKR札幌に若干の室数を確保するとともに、東京と札幌の旅行社に対し東京や各地からの航空券と宿泊とのパック販売を要請しています。

## 書道史学会・講演センター03

担当講師・演題一覧（50音順）

● 有田 国夫（ありた・くにお／号光甫、大正7年生、学会会員）

①「近代日本における書論の展開―主として、明治・大正の書論を中心に―」

②「昭和前期比田井天来の書芸術運動をめぐって」

③「新しい書画―致論の展開―戦後の書と抽象絵画との交流」

● 石井 長四郎（いし・ちようしろう／号長慶、昭和8年生、学会会員、東京成徳大学深谷高校講師）

①「書を立体表現する『刻書の技法』」

● 石田 千秋（いしだ・ちあき／昭和7年生、学会会員、日本大学高校教諭）

①「武丁期（第一期）甲骨文について」

● 大野 修作（おの・しゅうさく／昭和26年生、学会常任理事、京都女子大学教授）

①「宋の三大家（蘇・黄・米）」

②「清末碑学派（何紹基、趙之謙）」

● 「三国時代の出土資料と石刻」

● 大橋 修一（おはし・しゅういち／号樹道、昭和25年生、学会常任理事、埼玉大学教授）

①「素材から見た書道史」

②「碑、法帖入門」

● 「江戸時代の書―長崎貿易を通して―」

● 笠嶋 忠幸（かさしま・ただゆき／昭和41年生、学会会員、出光美術館学芸員）

①「古代・中世の絵巻と詞書について」

②「桃山時代から江戸時代初期の書壇史、書道史」

③「江戸時代唐様の諸相（墨跡と茶道関係を含む）」

④「富岡鉄斎の作品」

● 「貫名崧翁の作品」

● 萱原 晋（かやはら・すすむ／昭和15年生、学会常任理事、カリタス女子短大講師）

①「西洋美術に学ぶ書表現のヒント」

②「朝鮮半島書芸史入門」

● 「世界の handwriting 研究の現状と展望」

● 河内 利治（かわち・としはる／号君平、昭和33年生、学会理事、大東文化大学助教授）

①「日本、中国、台湾の書法芸術および書道教育の比較」

②「中国書法美学範疇論」

③「黄道周の書法芸術」

## 本年度・第14回大会研究発表募集

今秋の第14回大会は、別項でご案内の通り、札幌市北区の藤女子大学キャンパスで開催の運びとなりました。そこで例年通り、会員各位より下記の要領で研究発表の申し込みを受け付けます。書学・書道史ならびに関連諸分野の斬新な研究成果の発表を期待します。奮ってお申し込み下さい。

### 記

- 1) 発表日時：平成15年10月11日（土）午前～午後（今年度も日本部会、中国部会、全体会の分科会方式を採用する方針です）
- 2) 発表時間：各40分間（質疑応答時間10分を含む）
- 3) 申込方法：適宜の形式の「大会発表申込書」に標題・氏名を明記し、別途800字程度のレジюмеを添えて下さい。
- 4) レジюмеの形式：レジюмеは、9月末発行の本会報第6号に掲載する予定です。形式は原則としてワープロで作成し、テキスト形式でフロッピーに保存して提出して下さい（メール可）。図版は掲載できません。
- 5) 申込締切：平成15年7月17日（木）＝必着＝
- 6) 決定と通知：8月2日の学会理事会および大会運営委員会で決定し、個別にお知らせします。

※本大会発表については、編集委員会は学会誌『書学書道史研究』第14号（平成16年秋刊）への論文投稿申し込みを受理したものととして扱いますので、改めての学会誌への投稿申し込みは不要です。

※この論文原稿の締切は、来年3月末日です。投稿原稿は、査読委員会で採否が決定されます。学会誌掲載についてご不明の点は、編集委員会まで文書でお問い合わせ下さい。

※大会発表申込書とレジюме（フロッピー）は、封筒に「発表レジюме在中」と明記して下記へお送り下さい。なお、事故を避けるため、出来るだけ配達記録郵便をご利用下さい。

〈送り先〉〒150-0031東京都渋谷区桜丘町29-35 ヴィラ桜ヶ丘ビル7F

書学書道史学会国内局・'03札幌大会運営委員会 宛

- ④ 「中国の思想と哲学」
- ⑤ 「中国文学と書法」
- 河野 隆（かわの・たかし／昭和23年生、学会会員、大東文化大学専任講師）
  - ① 「昭和初期の篆刻の一断面―西川寧・生井子華往復印稿を通して―」
  - ② 「印款と採拓法」
  - ③ 「鈴印の心得―鮮やかな印影を得るために―」
- 興膳 宏（こうぜん・ひろし／昭和11年生、学会理事長、京都国立博物館館長）
  - ① 「王羲之とその時代」
  - ② 「書論の展開」
- 澤田 雅弘（さわだ・まさひろ／昭和29年生、学会常任理事、群馬大学教授）
  - ① 「何紹基、趙之謙とその周辺」
  - ② 「代筆と模倣の社会」
  - ③ 「飲墨信仰」
- 神野 雄二（じんの・ゆうじ／昭和29年生、学会会員、熊本大学助教授）
  - ① 「篆刻の歴史と鑑賞」
  - ② 「日本印人について」
- 杉浦 妙子（すぎうら・たえこ／号華桂、昭和25年生、学会理事、二松学舎大学講師）
  - ① 「平安期における仮名古筆について」
  - ② 「日本の書論について」
  - ③ 「古典文学の中に表現される書の表記について」
- 杉村 邦彦（すぎむら・くにひこ／昭和14年生、学会副理事長、四国大学教授）
  - ① 「中国の書人の人間像とその書芸術（王羲之、顔真卿、蘇軾、米、許友、傅山等）」
  - ② 「近代日中書法交流史（楊守敬、張廉卿、羅振玉らと日本人の交流など）」
  - ③ 「日本近代の書人（内藤湖南、長尾雨山、日下部鳴鶴、松田雪柯、巖谷一六等）」
- 鈴木 晴彦（すずき・はるひこ／号貞斎、昭和29年生、学会常任理事、昭和学院短大講師）
  - ① 「日本古代碑の世界」
  - ② 「日本金石学研究について」
  - ③ 「江戸書道譚」
- 高城 弘一（たかしろ・こういち／号竹苞、昭和39年生、学会幹事、大東文化大学助教授）
  - ① 「香紙切」の謎
  - ② 「料紙について」
  - ③ 「王朝かな古筆について」

## 追 悼

## 大庭脩先生を悼む

興膳 宏

昨年十一月二十七日、大庭脩先生が急逝された。しばらくお目にかかる機会を得なかったが、先生のイメージはいつも活力に溢れた感じだったので、新聞の訃報欄の記事がにわかに信じられぬ思いだった。

大庭先生との出会いは、私が愛知教育大学にいたとき、先生を集中講義にお迎えしたことが機縁だから、今からもう三十五年ばかりも前になる。当時、私の知る先生は、秦漢法制史や漢簡研究の分野での気鋭の研究者で、見るからにエネルギーの塊のような印象を受けたことが忘れがたい。

そうした本来の専門分野で、先生はもちろんその後も着々と実績を重ねられていった。だが、実はそのころ、私などが想像もしなかった新しい分野で、先生はすでに瞠目すべき成果を世に問うておられたのだった。『江戸時代における唐船持渡書の研究』と題する大冊が刊行されたのは、一九六七年のことである。このような視点からの中国文化受容の研究は、日本文化史研究に新生面を開く画期的な意義を有していた。それは大庭先生の得意のレパートリーとして、そののちさらに大きく展開され、八六年には『江戸時代における中国文化受容の研究』で学士院賞を受賞された。

大庭先生は、書学書道史学会の創立準備が始まったところから、この学会の設立に大きな意義を認められ、積極的にその実現に尽力された。そして、本学会が誕生してからは、長く理事を務められ、定年制でその地位を退かれてのちは、名誉会員に推されて今日に至っている。ご自身が館長の任に在られた大阪府立近つ飛鳥博物館で、本学会の大会を開催させてい

ただいたことも、我々の記憶になお鮮明である。

本学会のために力強い後ろ盾を亡くした喪失感は大い。ここに先生の本学会へのご貢献に心から感謝しつつ、ご冥福をお祈りしたい。



大庭脩氏

- ④ 「『小島切』について」
- ⑤ 「古筆学への招待（古筆学入門）」
- 鶴田 一雄（つるた かずお／号逸亭、昭和27年生、学会理事、新潟大学助教授）
  - ① 「中国新出土の書」
  - ② 「春秋・戦国時代の文字資料」
- 中村 伸夫（なかむら のぶお／昭和30年生、学会常任理事、筑波大学助教授）
  - ① 「戦国文字の書法―八郭店楚簡Vを例として―」
  - ② 「清末民初期の中国書法について」
  - ③ 「20世紀の中国書法―激動の中の伝統芸術―」
- 名児耶 明（なこや あきら／昭和24年生、学会理事、五島美術館学芸部長）
  - ① 「遺墨から見る仮名文字の変遷」
  - ② 「定家様（定家流書風）の成立の意味」
  - ③ 「御子左家と伝西行筆古筆」
- 野中 浩俊（のなか ひろとし／号吟雪、昭和16年生、学会監事、新潟大学教授）
  - ① 「文人・富岡鉄斎―書を中心として―」
  - ② 「書の愛好―書を楽しむには―」
  - ③ 「書と書の周辺―鑑賞の方法・親しみ方―」
- 日野 俊顕（ひの としあき／昭和4年生、学会会員）
  - ① 「百代の新風―中林梧竹の書―」
  - ② 「十七帖臨書のバージョンアップ―梧竹の書の進化―」
  - ③ 「書の極意と心の悟り―梧竹堂書話の思想―」
- 三宅 高司（みやけ たかし／号相舟、昭和20年生、学会会員、東洋大学教授）
  - ① 「『関戸本古今和歌集』の研究―書写年代の考察とその美について―」
  - ② 「かな書の美と芸術」
  - ③ 「たしなみと教養」
- 森岡 隆（もりおか たかし／昭和30年生、学会幹事、筑波大学助教授）
  - ① 「仮名の字形と表記法に見る唐書風の受容」
  - ② 「仮名の発達及び手習歌の変遷」
  - ③ 「古筆復元の試み」
- 横田 恭三（よこた きょうぞう／号閑雲、昭和29年生、学会会員、跡見学園女子大学助教授）
  - ① 「戦国楚簡文字の変遷」
  - ② 「日中交流史―水野疎梅の場合―」

## 草塩藻学書

## 「エリオットコレクションと

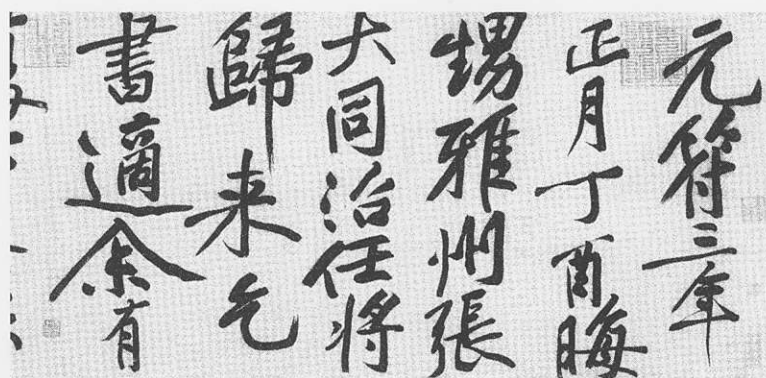
## 宋元の名蹟」展から

大野 修作

大阪市立美術館で開催されている「海を渡った中国の書―エリオットコレクションと宋元の名蹟―」展を見、同展シンポジウムのパネラー役を務めて改めて宋元の名蹟の迫力を実感したが、ここでは黄庭堅の「贈張大同書」（挿図）と「廉頗蘭相如伝」の二点を中心に述べてみたい。ともに日本で初めて公開される名品で、米国まで足をのばさないと見られなかった貴重品である。「贈張大同書」は跋部分のみが残っており、跋だけでも興味のある内容であるが、前半には韓愈の「送孟東野序」が書かれていたことが、『蘇黄風流小品』という内閣文庫蔵の山谷題跋によって知ることができる。ちなみに通行の四部叢刊本や津逮秘書本ではその存在を知ることができないことも、書学研究の困難さを物語っている。「廉頗蘭相如伝」は、「李太白憶旧遊詩卷」と筆致が極めて似た名品で、現存する黄庭堅最大の作品である。

それにしても、黄庭堅の伝世の名品のほとんどが五十歳以降に書かれており、しかも大半が他人の詩文である（『史記』の「廉頗蘭相如伝」であり、李白の「憶旧遊詩」であり、劉萬錫の「経伏波神祠」であり、韓愈の「送孟東野序」である等。「松風閣詩卷」は自作の詩を書いた少数の例）ことは、書の作品は誰に帰属するのかわからないことを考えさせてしまう。もし写経生が書いたものなら、それは単なる詩文の原拠であるテキ

ストの一つであるとなされるであろう。しかし黄庭堅が書いたものは、他人の詩文であっても、黄自身の全身体的思考によって支えられており、黄庭堅の作品そのものであるといえる。即ち前人の詩文を書くことは、まずその文章に対する熱い共感があることはもちろんであり、文章家として言葉をつむぎ出すエネルギーのほとんどを、書の線の造形に打ち込んで独自の世界を構築することに費やされているからである。ここに唐宋以降の伝世品を書論として扱う困難さがある。



最近の書学研究は、木竹簡をはじめ、新出土品に対する研究が多くなりつつあるが、後漢以前のものは、ほとんどが固有名詞としての筆者名のわからないもので、いわば文字、書体研究が中心といえる。ところが中唐以降、個性的な書が盛んになるにつれ、その研究方法は、それ以前とは異なったものにならざるをえないが、その方法も法書の所在目録も確立していない所に難しさを感じるとともに、新しくチャレンジする研究者が少なくなっていることに、より本質的な不満と不安を覚えている。



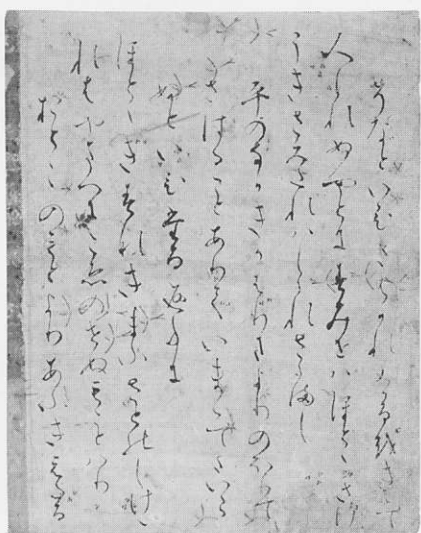
Today's  
Feature

## 新出の「本願寺兼輔集切」

高城 弘一

三月二十五日から五月五日まで、東京国立博物館で「西本願寺展」が開催された。今回の目玉は、本願寺三十六人家集が全冊公開されるということで、これは初の快挙である。だが、三期に分けられ、順に陳列されていったのは記憶に新しい。

明治二十九（一八九六）年、大口周魚が西本願寺の庫裡で三十六人家集を発見した当時は、三十六家集・三十九帖であった。家集と帖との数が一致しないのは、『人麿集』『貫之集』『能宣集』が上下に分かれているからである。この内、



新出「本願寺兼輔集切」

当初の書写本が三十二家集・三十四帖で、残り四家集・五帖というのは、『兼輔集』が平安末期の補写本で、『人麿集』上下、『業平集』小町集』が江戸時代の補写本である。

当初の『人麿集』は江戸初期頃までに分割され、「室町切」として二葉が現存し、『業平集』は同じく「尾形切」として十数葉が確認される。この『人麿集』は当初一帖であった可能性が高く、もとは三十六家集・三十八帖ということになるのか。『順集』や『仲文集』は部分的に抜き取られ、前者は「岡寺切」（糟色紙）とも）として十数葉、後者は特に固有名はなく二葉ほど確認できる。因みに、「石山切」は昭和四年に『貫之集』下と『伊勢集』とが分割され命名された新名物切である。

今回組上にする『兼輔集』は、平安末期の補写本にも関わらず、料紙四枚分（八丁分）、洋装本の数え方という十六頁分が抜き取られ、古筆切として諸家に行き渡ることになった。小松茂美博士著『古筆学大成』では、この新出「本願寺兼輔集切」を六頁分拾遺し、図版として掲げられている。しかし、原本が焼失し写真だけが残るもの、大口周魚による摸写断簡も含むので、この六葉と現存数は、必ずしも一致するものではない。

「西本願寺展」の第三期でも、この『兼輔集』が陳列され、あたかも完本のように見開きで広げられていたが、如上の理由により零本というべきものである。

この度、この「本願寺兼輔集切」が新たに発見されることになった。すなわち、欠落部の十六分の一を確認することができた。それは書写内容も当然のこと、筆跡（伝寂蓮筆）・料紙（から紙や金銀泥による下絵）・一頁の行数（九行）など、あらゆる角度から総合的に判断して、ツレと認定したのである。国宝の一部を補うものとして、誠に貴重な断簡の新出というべきものであろう。



## 学会だより

## 4氏を「名誉会員」推挙「理事会」

昨秋の第十三回大会（於京都教育大学）に際して開かれた第三十一回定例理事会において、長年にわたり斯学の発展と学会運営に貢献された以下の四氏を、新たに「名誉会員」に推挙することが決定されました。

◇池田温会員（いけだ・おん／昭和六十年生まれ）中国古代中世史、東アジア前近代文化交流史／東京大学文学部卒、同大学院修／前東京大学東洋文化研究所教授／現創価大学教授。学会には平成二年四月入会。理事三期、常任理事二期を務められた。

◇木下政雄会員（きのした・まさお／昭和六十年生まれ）日本古代中世書道史／立命館大学文学部卒／元京都国立博物館学芸課資料室長、前堺市博物館副館長／現大手前女子大学教授。学会

には平成二年四月入会。理事五期を務められた。

◇久米公会員（くめ・いさお／昭和五十年生まれ）書写書道教育／広島大学教育学部卒／元文部省視学官、元千葉大学教授、前大東文化大学教授／現四国大学教授。学会には平成二年四月入会。理事五期、監事一期を務められた。

◇西林昭一会員（にしば・よし・しょういち／昭和七十年生まれ）中国古代理史／大東文化大学文学部卒／元跡見学園女子大学教授、前淑徳大学教授。学会創設に関わった五人委員会の一員。理事長五期、理事一期を務められた。

## 2氏を「参事」推挙

《理事会》

学会ではまた、昨年の本会報による会則改正手続きに基づいて「本会名誉会員推挙規程」に合致する理事・監事の役職にない満70歳未満の会員の参事推挙が会則に規定されたのに伴い、第三十一回定例理事会で次の二氏を「参事」に推挙することが決定されました。

## 15年度事業・活動計画（案）

- 4月1日 「2003会員名簿」発行
- 4月10日 本部付幹事顔合せ会・会報編集会議
- 6月1日 会報第5号発行
- 6月1日 「学会講演センター'03」スタート
- 6月下旬 学会将来計画委員会会議
- 6月下旬 編集局編集会議（学会誌）
- 8月2日 第32回臨時理事会会議（於東京）
- 8月上旬 第14回大会運営委員会（於札幌）
- 9月1日 『新編・書道史年表事典』発行（発売）
- 9月下旬 会報第6号発行
- 9月末日 学会誌第13号発行
- 10月10日 第33回定例理事会会議（於札幌）
- 10月11日 第14回大会（於藤女子大学）
- 10月12日 第14回大会特別行事（予定）
- 12月中旬 第Ⅷ期役員改選選挙告示
- 12月末日 学会誌第14号投稿申込締切
- 1月下旬 常任理事会（予定）
- 2月下旬 第1回書学書道史公開講演会（予定）
- 3月中旬 第Ⅷ期役員改選選挙
- 3月下旬 第34回臨時理事会会議（於東京）
- 3月末日 学会誌第14号投稿原稿受付締切

## 編集後記

◆新型肺炎のニュースを耳にするたびに、中国の恩師や友人の事が気になります。書を学ぶために中国に留学している方々は帰国したのでしょうか。この会報を手にする頃には沈静に向かっているといふのが、（小川博章）

◆通勤の途中、二輪草の小群落があり、清楚な白い花の夕方に閉じて、時を待つ姿に、つくづく切には余裕を持っていたと思つた。（柿原原クミ）

◆四月三十日付読売新聞夕刊に、「欠落にカラー図版入りで記事が掲載された。この「本願寺兼輔集切」の鑑定に関わり、読売新聞本社で取材を受けた。その関係で、急遽この会報にも紙面を割愛頂いた次第です。（高城弘一）

◆今年も様々な中国との交流展が計画され、秋には遼寧省博物館新館の竣工

◇角井 博会員（かくい・ひろし／昭和十三年生）

◇松丸道雄会員（まつまる・みちお／昭和九年生）

## ◆会員動静

- ◇池田温会員（いけだ・おん）熱三等旭日中綬章（教育研究功労）受賞
- ◇西林昭一会員（にしば・よし・しょういち）和歌山県文化功労賞受賞
- ◇角井博会員（かくい・ひろし）松涛美術館長就任
- ◇菅野智明会員（すがの・ともみ）筑波大学芸術専門学群美術（書）コース専任講師新任
- ◇鶴田一雄会員（つるだ・かずお）新潟大学教育人間科学部教授昇任
- ◇蓮見行廣会員（れんみ・ひろし）東洋大学文学部教授昇任
- ◇松本文子会員（まつみ・ふみこ）鶴見大学文学部専任

講師新任  
○杉村邦彦会員（しんむら・くにひこ）四国大学文学部書道文化学科教授新任  
○谷口邦彦会員（たにぐち・くにひこ）安田女子大学文学部専任講師新任  
○神野雄二会員（かみの・ゆうじ）熊本大学教育学部助教授新任

## 新入会員紹介（平成14・4・15・3）

- 丸山旭恵 S34生
- 韓天雁 S57生 中国美術学院教授
- 張 莉 S68生 京都大院生
- 中島美和 S54生 淑徳大院生
- 中村雅昭（素岳） S12生 貞香会理事長
- 倉本光雄 S10生 前府立高教諭
- 朴 彦 S75生 京教大院研究生
- 岡本和恵 S38生 淡海書専教授

記念展をはじめとする行事が予定されているが、S25の猛威は衰えを見せない。各方面で深刻な影響が出ているだけに、一刻も早い沈静化を祈念したい。

◆「少年老い易く学成り難し」を痛感する年男です。道草を食みながらの羊歩ですが、一歩ずつ前へと思ひおります。各人の前進が、学会の前進になります。（森岡 隆）

◆「会報」第五号をお届けする。今号で早くも三年目に入る。やっと編集作業の段取りにも慣れてきた。これもひとえに、ご執筆各位ならびに編集委員諸氏の多大なご支援の賜と深謝申し上げます。二、三頁にご案内の通り、本年度は大会開催日程が例年よりも一ヶ月余り早まっている。しかも、本学会初の北海道での開催である。会員諸氏におかれては特にご留意いただき、ご準備をお願い申し上げます。（鈴木晴彦）